



卒業式祝辞に 込められた思い

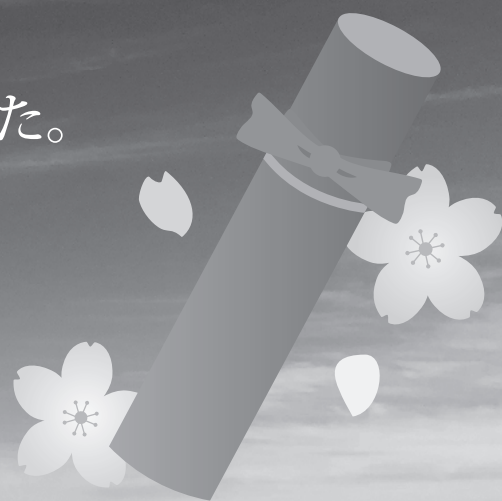
開発コンサルタント・小説家 経済学部OGの松村みかさん



今年3月の「2018年度第136回中央大学卒業式 大学院修士学位授与式」(経済学部・商学部・総合政策学部・大学院)で、祝辞を述べた松村みかさんは、本学経済学部の卒業生だ。卒業後、青年海外協力隊を経て、世界各国で開発コンサルタントの仕事をするかたわら、小説家としても活躍している。そんな松村さんに、祝辞に込めた思い、卒業式の意味、学生へのメッセージを聞いた。

学生記者 津田 翔 (法学部3年)

「私自身の卒業式の日、大学へは向かわず
鎌倉へ海を見に行きました。
だだっ広いものが見たくて、自分の小ささを確認しに。
式には出なかったけれど、
あの日、眺めた海は心の区切りになった。
負けてたまるかって思いながら——」



「晴れやかな卒業式に出ることに
気後れしてしまいました」。祝辞の中
で、自身が卒業式に出席しなかった
理由をそう説明した。大学2年の1
月に父親が亡くなり、実家の印刷業
の仕事に携わり始めた。夜は留学生
寮でのボランティア活動、昼間は印
刷の仕事という毎日で、ほとんど通学
できなくなった。何とか卒業はした
が、きちんと勉強できたかと問われ
れば心もとなかった。

「大学に友達はいたけれど、自分
だけ違う景色を見ている気がして少
し疎外感がありました。(大学生活
は)心残りが多かった」と振り返る。

卒業式の日、一応は「卒業式に
行く」と言って仕事を休み、鎌倉の七
里ヶ浜の海、水平線を眺めて、門出
を迎えた。

「どこかで『負けてたまるか』って思

いながら。あの日の景色は、今も私
の中に残っています」

「繊細な絹糸と たくましい荒縄」

3月に卒業生たちへのはなむけと
して贈ったのは「繊細で美しい絹糸
と強くてたくましい荒縄をより合わせた
ような神経を持ちなさい」というメッ
セージ。松村さんの母親が、熊本の
女学校を卒業した際に校長先生の
祝辞として聞き、事あるたびに松村さ
んに言って聞かせた言葉だという。

なぜ、この言葉を卒業生に贈った
のだろう。鎌倉の海の思い出は、松村
さんの中にある「荒縄」の一部となっ
ているのかもしれない。

母親の生き方や人生にこの言葉
が与えた影響を松村さんは聞いてい

ない。それでも「母もどこかで『負けて
たまるか』だったのではないでしょ
うか。私が青年海外協力隊で国外に出
てしまった後は、母が印刷の仕事に切
り盛りしていたわけですから」と話す。

順風満帆とはいえない学生時代
を送った松村さんにとくに影響を与
えたのは、ボランティアをしていた留
学生寮で接した留学生たちだった。

青年海外協力隊の体験 「私が救われた」

「留学生との交流は私には一番大
きかった。彼らはみんな違っていて。
それぞれ事情があって、お金にも苦
労していた。彼らと議論をしたり、そ
れまで教わらなかった日本のことを
教えてもらったりすることは刺激的で



面白かった。彼らの国の事情を聞くことで、彼らの国にも行ってみたいと思いました」。言葉通り、在学中にタイやシンガポール、マレーシアに渡った。

卒業後、青年海外協力隊として活動する際も、「助けに行くぞ!という気持ちより、家のこととか、しっかり勉強していないことへの負い目とかがあって、結局逃げのように海外に行った」という。「キラキラした日本の若者の中にいるよりは、海外のほうが居心地がよく、苦勞をしている人たちのほうが共感をもてたんです。途上国援助というより、私が救ってもらった」とも。松村さんは海外での活動に「救われた」と何度も口にした。

「免疫がつくし、若いうちに失敗し



「精いっぱい人生をまっとうしてほしい」と卒業生にメッセージを贈った松村さん

たほうが人としての土台が広がる」。若い頃の失敗はいくらでも修正がきくよ、と松村さんは繰り返す。著書の『老後マネー戦略家族!』でも、うつ病になり就職した銀行を辞めてしまった「宇宙(そら)」という人物が登場する。彼は一度社会から離れ、立ち止まってしまうが、自分らしい生き

方を見つけていく。

松村さんは乗り越えるべき課題を山にたとえた、こんな話もしてくれた。

「初心者でも登りやすい高尾山に何度も登るより、槍ヶ岳に登ろうとして失敗したほうが、次につながる。自分の能力を知り、ちょっと背伸びをし

祝辞要旨

私は、1985年3月に経済学部を卒業しましたが、どちらかというと心残りが多く、卒業式にも出席しませんでした。実は、大学2年の1月に父が急逝して、それ以降ほとんど仕事で大学に通えず、単位取得でなんとか卒業はできたのですが、満足いく学生生活とは言えませんでした。それで、晴れやかな卒業式に出席することに気後れしてしまいました。

皆さんにどんな言葉を送ったらいいのでしょうか。色々悩み、周囲の友人、知人に卒業式について聞いてみました。意外に、卒業式に出なかったという人も多く、出たけど、何を聞いたか覚えていないという人がほとんどでした。

そんな中で、ひとり、卒業式の訓示を覚えていて、折に触れ、思い出してその

言葉をかみしめた、という人がいました。私の母です。きょうは、母が女学校を卒業したときに聞いた祝辞を、時代を超えて皆さんに贈りたいと思います。

「繊細で美しい絹糸と、強くたくましい荒縄をより合わせたような神経を持ちなさい」

つまり、美しくてしなやかで柔らかい心、がさつでたくて、でも切れない心、その両方を合わせ持ちなさい、ということです。

母は1946年3月に熊本の女学校を卒業しています。1945年8月に終戦ですから、翌年の3月に卒業したということです。母は戦時中に教育を受け、終戦を迎えた混乱期に社会に出なくてはなりませんでした。

翻って現代。日本は平和です。でも、

未来を見通すことができない現実という意味では、昔も今も変わりません。そして、いいこと、悪いこと、皆さんの前に次々に現れるはず。不条理、理不尽、なんで?と思うことも必ずあります。そのとき、戦争直後に田舎の先生が若者に贈ったこの言葉を思い出してください。繊細できれいな心。重要です。どんなに社会が汚くても心の清らかさ、優しさは失わないでほしい。同時に、粘り強く、図太く、時には鈍感になって事態をやり過ごす荒縄の神経も必要です。簡単に切れてはいけません。

人生はさまざま。一筋縄ではいきません。でも、どうか、一人ひとり、精いっぱい自分の人生をまっとうしてください。



松村みかさん

1985年3月、本学経済学部卒。開発コンサルタント、小説家。大学卒業後、青年海外協力隊を経て、世界各国で電力開発や医療、道路などのインフラ案件に携わる開発コンサルタントの仕事に従事。その経験、知見をもとに小説家としても活躍している。『ロロ・ジョングランの歌声』（2009年3月刊）で第1回城山三郎経済小説大賞を受賞。今年4月から本学経済学部客員講師として「海外インターンシップ」に関する講義を受け持っている。

た挑戦をしていくことで、見極めができるようになる。自分の限界もわかり、自分をコントロールできるようにもなる」

失敗し、自分自身を知り、反省を次に生かすことで、少しずつ高い山を登ることができるようになる。目指す頂上があるからこそ頑張れるというのだ。

「たくましく生き抜いて」

開発コンサルタントの仕事も挑戦の連続だ。毎回、行く国も違えばプロジェクトも違う。同じ電力開発でも、た

例えばネパールとカンボジアでは社会的ニーズは違う。「同じことの焼き直しはできない」という。

人は日々の中で、閉塞感や生きづらさを感じる瞬間が訪れることがある。失敗して落ち込む日もあるかもしれない。大学になんとなく入学し、卒業後はどこかの会社に勤めなきゃという、どこか周囲に流されたような意識の学生もいるかもしれない。

松村さんに、そんな若者へのメッセージを尋ねると、「もっといろいろなことを楽しんでいいと思う。楽しいという感覚を自分の中でもっと生み出してほしいなあ。勉強もそうだし、

見ることも聞くことも全部。せっかく一度きりの人生なんだから、悔しい思いをしてもいいし、感情の起伏がフラットなより、そうした部分を持ってほしいな。私なんて人の3倍も生きてやろうって最近思いますよ」と力を込めて話してくれた。

3月の卒業式の祝辞は「一人ひとり、精いっぱい自分の人生をまっとうしてください」との言葉で結ばれた。どんなときも「たくましく生き抜いてほしい」という卒業生へのエールだ。

編 集 後 記

海外に出て自分を変え、得た知識や経験で相手(の国)を変える。その後、帰国したら母国を変えていく。

松村さんは、自身の活動を3つのステップで捉えていた。まず、さまざまな経験や勉強を通した主に30代までの「自分へのインプット」。開発コンサルタントという仕事で「相手の国を変える」。そして、帰国後の小説家としての執筆活動で「自分の国を変える」ということ。「変える」とはもちろん、世の中に向けてさまざまな影響を与える活動をするということだ。

開発コンサルタントと小説家はまったく別の仕事のように見えるが、松村さんにとって小説家はこれまでの活動の集大成といえる。「経験したことを次の世代に伝える責任がある。さまざまな現場に立っていた人間として何かを伝える役割がある」。執筆活動を始めた理由をそう話してくれた。

「人の3倍生きてやろうと思っていました」と松村さんは笑う。それが、仕事をしながら小説を書き、大学で授業を持ち、音楽祭などの地域活動にも携わる松村さんの生き方の軸なのだろう。

学生時代、留学生に救われたと話した松村さんは今、世の中に何かをもたらす側に立っている。著書も読者を引きつけるストーリー展開だけでなく、何らかの学びを得られる要素が込められている。

松村さんから豊かな感受性と、社会を生き抜く強い生命力を感じた。社会を生き抜いていくには、挑戦を繰り返し、自分自身を知っていくことが必要だ。社会には理不尽なことがあふれているかもしれないし、悔しいこともあるだろう。けれど、何も起こらないよりは、ずっといい。(津田翔)